PDF Compressor Free Version

ふるさとの歴史 こぼれ話 Vol.14.

岐阜市を襲った「三年連年災害」

昭和34年伊勢湾台風、35年11・12号台風、36年梅雨前線豪雨等

ここ数年、日本各地を超大型の自然災害が襲い大きな話題となっています。その都度、「岐阜は災害と縁がなくて有難いね」「岐阜は住みやすくて良い所やね」「長良川の堤防も大きく頑丈な堤防で安心だね」…こんな会話をよく耳にします。ほんとうにそうなのでしょうか？岐阜市が大きな災害に遭ったことはないのでしょうか？

1．昭和34年9月　伊勢湾台風

岐阜市でも17人の犠牲者が！

この台風は、史上最強とも言われる超大型台風で、特に大きな被害を受けたのは愛知県と三重県で、愛知県の犠牲者は３３５１人（名古屋市１９０９人）、三重県の犠牲者は１２１１人というすさまじいものでした。

非常に強い南からの暴風による吹き寄せと低気圧による吸い上げの影響で高潮が起こり、名古屋市南部を含む伊勢湾岸の干拓地を襲ったもので、そのことから「伊勢湾台風」という名前が付けられました。

この伊勢湾台風は岐阜県も直撃し、各地に大きな爪痕を残し、県内の犠牲者は計１０４人（死者87人、行方不明者17人）にも及びました。岐阜市でも死者14人、行方不明者３人、計17人の犠牲者が出ました。

特に強風による被害は大きく、岐阜市においても家屋の倒壊（全壊３９２戸、半壊７３７戸）や倒木の被害が多発し、多数の死傷者が出たのです。

また、台風の中心が県西部を縦断したため、県内各河川はいずれも近年にない出水となり、長良川・揖斐川は今までの最高水位を上回る大出水となりました。岐阜市忠節で27日５時には警戒水位を３ｍ上回る５．５ｍに達しました。

山間地域においては山崩れ・がけ崩れを誘発し、住宅などを破壊・埋没させ、多数の死傷者を出しました。

平野部においては広範囲にわたる浸水被害をもたらしました。

長良川は、岐阜市芥見、三輪地内や関市保戸島地内で破堤し、付近一帯に濁水が湛水しました。

34年9月　長良中鵜飼

34年9月　藍川橋流失

昭和34年9月30日「岐阜タイムス」

▼「恐ろしいことだ。今でも悪夢を見たとしか信じられない」と部落の人たちは声をふるわせる。岐阜市加野部落、ちょうど長良川にかかる藍川橋を北へ渡った所。堤防沿いに集落を形造っている１８０戸は、恐怖のあの夜、堰を切って襲った長良の濁流にすっぽり姿を消したのである。暗闇に乱打される半鐘、渦巻く非情の泥水、そして屋根伝いに逃れる人の群れ。

▼一方、対岸の芥見方面でも痛ましい惨事。長良川の左岸堤防があっという間に切れ、これまた加野部落と同じように濁流にもてあそばれたのである。藍川橋寄りの町屋部落をはじめ、南町一帯は軒並み屋根まで水が浸かり、家財道具を失ったものは数えるだけでもきりがない。

岐阜市日野・雄総・長良橋付近も浸水被害を被りました。長良橋南岸では湊町・玉井町・御手洗池一帯が冠水し、その後岐阜公園の北の本堤防も溢流し、大宮町・大仏町・松ヶ枝町や梶川町の一部も浸水しました。

北岸においては、鵜飼屋から田カ脇の住宅のある河川敷が瞬く間に浸水し、濁流はさらに本堤防までも溢流し、長良北町から長良平和通りに至る道路の南に位置する住宅街へ浸水したのです。

この他にも、排水不良など内水湛水の被害なども含めて、ほぼ岐阜市全域で家屋流失６戸、床上浸水３１６３戸、床下浸水２９４１戸にも及びました。

2．昭和35年8月　11・12号台風

大雨で伊勢湾台風を上回る大被害

両台風の風による被害は岐阜県ではほとんどなかったのですが、雨による被害は甚大でした。長良川上流域においては、11日と12日には既に雨量２００㎜～３００㎜の豪雨になっていましたが、13日早朝から午前中にかけて集中的な豪雨に見舞われました。このときの時間雨量は長良川上流域・中流域で20㎜～50㎜というもの凄いものでした。

このため長良川水系は急激に増水し、伊勢湾台風時の出水を上回る出水となり、各地に大被害をもたらしたのです。特に二年続きの芥見・加野・三輪・保戸島、そして岩田・日野における破堤は、長良川一帯を濁流の海と化しました。

また岐阜市とその周辺地域においては、長良川堤防の低い所は全て溢流するなど、危険にさらされました。

中でも長良橋付近の両側地域や上流部における溢流は顕著でした。このために13日午前９時12分には長良橋両詰の堤外地に住む約４００戸の人々をはじめ、これより上流部の志段見・古津などの人々にも避難命令が発令されました。

破堤した芥見・町屋

この溢流で、古津・雄総・長良南町や長良橋南詰一帯は軒下まで浸水し、川北地区も広範囲にわたって浸水しました。

更に、岐阜市各地で排水不良のための内水湛水の現象が発生し、被害を大きくしました。

35年8月　長良中町

3．昭和36年6月　梅雨前線豪雨

芥見・加野は3年連続破堤・岐阜市の80％が浸水

昭和36年（１９６１）６月下旬、梅雨前線が急に活発化し、24日から降り始めた雨は26日には記録的な豪雨となり、27日まで続きました。23日から30日までの実測降雨量は６１８㎜で、平年値の１０６．７㎜に比べると約５．８倍と、この降雨量がいかに多かったかが分かります。

前年の11・12号台風の洪水以上の出水となり、芥見・加野及び関市保戸島では、34・35年に続き「三年連続破堤」の被害に見舞われました。また長良橋付近でも、長良川の左右両岸より濁水が溢流し、付近一帯の地域が浸水に見舞われました。

岐阜市内では、その支川が本川の水位上昇のために排水能力を失い、支川流域に降った雨はそこに溜め込まれることになりました。このために鳥羽川・伊自良川・板屋川・境川・荒田川・論田川などの各支川は全て溢流・氾濫しました。従ってこれらの支川の下流部ほど溢流および内水による湛水深も大きく、洪水面積も拡がる結果となりました。中でも岐阜市南部の論田川・荒田川・境川下流部・岐阜市西部の天王川下流域では７日以上、東部の境川流域では５日以上の湛水被害となりました。

36年6月　三里・鶉

4．昭和36年9月　第二室戸台風

少ない被害…しかし死傷者も

規模的には伊勢湾台風に次ぐ超大型台風でしたが、上陸後の速度は速く、平野部では降雨量も少なかったので、岐阜市における被害は比較的少なくすみました。とはいえ、死者２人、負傷者18人、全壊１８２戸、床上浸水２５８戸、床下浸水２４１９戸などの被害が発生しました。

36年9月　加納・三里

この文章は、「岐阜市史」「岐阜県史」「木曽川上流80年のあゆみ」などをもとに、後藤征夫がまとめました。

岐阜市歴史博物館ボランティア
「お話・岐阜の歴史サークル」
代表　後藤　征夫
http://bookgeocities.jp/gifurekisi/rekisitop.htm
TEL 058-231-6726